メリー＝ウイドゥ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メリー＝ウイドゥ

【Ｎコード】
Ｎ３５８４Ｇ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
フランスの首都パリ。今この街はある国の美貌の未亡人ハンナが持っている財産の話でもちきり。そのハンナは自国の大使でかつての恋人ダニロに密かな想いを抱き続けているが当のダニロは今日も遊んでばかりで。レハールのオペレッタを小説にした作品です。こちらにも掲載してもらっています。
ｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐａｉｎｗｅｓｔ．ｎｅｔ／

第一幕その一

第一幕　まずははじまり

パリにあるポンテヴィドロ公使館のサロン。二つのホールが奥にありみらびやかな光に照らされたこの部屋において今華々しい顔の面々が笑顔でいた。それぞれドレスやイブニングで着飾り楽しく談笑している。

「いと楽しき紳士淑女の方々」

着飾った踊り娘の一人が言う。赤いみらびやかなドレスを着ている。

「この度は皆で祝いましょう」

「はい」

その中の一人である黒い髪と瞳の男が述べる。端整な中年の男だ。彼の名をツェータ男爵という。パリにおいても中々の名士である。絹のイブニングを着ている。

「さあそれでは」

踊り娘達はまた言う。

「男爵の為に乾杯を」

「さあシャンパンを」

「いえ、皆さん」

ところが男爵はここで言うのだった。

「今宵は我が陛下の為」

実は彼はフランス人ではない。ポンテヴェドロ公国の者だ。欧州の小国の一つでありスラブ系の古い国だ。伝統的にオーストリアとロシアの強い影響を受けている国である。

「ポンテヴェドロ公国の者として公爵の誕生日を祝いましょう」

「おお、それでは」

「皆で」

踊り娘達もそれに応える。そうして言うのだった。

「乾杯を」
「ポンテヴェドロ公爵に」
「乾杯！」
皆ここで乾杯する。男爵はそれを見て笑顔になる。
「どうもどうも。ところで」
男爵はふとあることに気付いた。
「家内はどちらへ」
「奥様ですか」
「はい、姿が見えませんが」
男爵はそう客人の一人に述べる。見れば黒い髪と目の東洋人の客人である。言葉の訛りから日本人であることがわかる。
「どちらに」
「あれ、先程までおられましたが」
日本人はそう答える。
「そういえばおられませんね」
「お酒を楽しまれているのでは？」
やけに大柄で顔の赤い男が出て来た。ロシア大使館からの客人である。言うまでもなくこの場においても酒を大いに楽しんでいた。
「今宵もまた」
「いえ、家内はお酒は」
しかし男爵はそれを否定する。
「お酒は」
「ああ、そういえば」
もう一人東洋人が出て来た。切れ長の目をしてすらりとした身体をしている。彼は日本人ではない。中国人である。彼も呼ばれているのだ。
「ロジョンさんとお話をされていましたな」
「ふむ、それはいけませんな」
金髪で青い目の明るい雰囲気の男がそれを聞いて怪訝な顔をわざと作ってきた。彼はアメリカ人だ。何と四国の客人が呼ばれもしな

いのに来ているのだ。呼ばれたのは日本だけだが後の三国は呼ばれもしていない。しかしいるのが彼等らしいといえばらしい。
「閣下、若しかすると」
「いや、それはありません」
しかし男爵はそれを一笑に伏す。
「我が妻に限ってそんなことはありません」
「そうでしょうか」
「はい。ほら」
そのフランス人ロジョンと右手の部屋で楽しく話す妻ヴァランシエンヌ男爵夫人を指差して言う。彼女は元々パリの踊り娘であり赤い髪と緑の目、はっきりした顔立ちの美女である。かつてはパリで名うての踊り娘であった。実は結構浮名も流してきている。
「つつましやかに話しているではありませんか」
「そうでしょうか」
「さて」
四国の代表達はそれを聞いて首を傾げさせていた。
「あまりそうは見えませんが」
「閣下、やはりこれは」
「あいや、それは邪推というものですぞ」
四人の言葉を笑顔で否定する。
「御覧になられればわかります、それは」
「まあそう仰るのなら」
「我々はこれで」
四人は引き下がる。男爵も笑顔で宴に戻る。しかし夫の目が離れると男爵夫人は早速昔の手馴れた手つきをフランス外務省きっての女殺しカミーユ＝ロジョンに見せていた。ブラウンの髪と目でやけに嫌味ったらしく着飾って涼しげで傲慢そうな笑みの二枚目だ。如何にもフランスのエリートといった感じである。嫌いな人間はあくまで嫌い抜きそうな、そうした独特な顔立ちの二枚目であった。

第一幕その二

「さて、マダム」
気取った声で男爵夫人に声をかけている。
「私は貴女に申し上げたいことがあります」
「それは何でしょうか」
「はい。私は今恋をしております」
お決まりの言葉を平然と述べる。
「誰にでしょうか？」
「女神に」
じっと男爵夫人を見詰めて言う。
「宜しいでしょうか」
「さて、女神とは結ばれませんが」
男爵夫人はそんな彼の言葉をまずはかわしてきた。
「それはどうでしょうか」
「だからこそです」
しかしカミーユも負けない。また男爵夫人に顔を向けて言うのだった。
「私はその女神の心を手に入れたいのです」
「女神は火遊びはしないもの」
「アフロディーテは火遊びが好きでしたが」
ギリシア神話の愛の女神を出す。笑ってこう述べる。
「それはどうでしょうか」
「女神にも色々ありますわ」
夫人はまた笑って応える。
「それは御存知では？」
「さて」
その言葉にはとぼけてみせる。
「そんなことは記憶にありません」

「では御存知あそばせ」
また笑って返す。
「それについても」
「では教えて下さい」
カミーユは負けない。そう言ってすかさず男爵夫人に問う、
「別の場所で」
「どうしましょう」
はぐらかしはするが隣の部屋に目をやる。
「それについては」
「光の中と闇の中では世界も違うもの」
詩人のようにして言う。
「今は光の中でのお言葉ですが闇の中では」
「どうでしょうか」
「それを知りたいものですが」
「あらあら」
そんなことを話していた。男爵は男爵で四国の者達と話をしていた。
「然るに男爵」
「はい」
日本人の言葉に顔を向ける。
「大使閣下はどちらでしょうか」
「今はここにはおられません」
男爵はそう日本人に告げる。
「残念ですが」
「それはまたどうして」
「ははあ、わかりましたぞ」
中国人がここで思わせぶりに言う。
「クラブですかな」
「するとですな」
ロシア人がそれを聞いて楽しそうに笑う。

「恋人のところで」
「いや、閣下も隅には置けない」
アメリカ人もここで笑う。
「ああ見えて」
「実はですね」
男爵はここで言ってきた。
「伯爵は相思相愛の方がおられたそうでして」
「ほう」
「それは初耳です」
四国の者達はそれを聞いて目をしばたかせてきた。
「しかし夢破れて」
「といったところでしょうかな」
「まあそこまでは存じませんが」
男爵はここでは言葉尻を捕まえられるのを気にしたのかとぼけてきた。そのうえで話を変えようとしてきた。
「それでですな」
「いやいや」
「この話はもう少し」
四国の外交官達は話をさらに聞こうとする。多分に興味本位である。しかし彼らにとってより興味のある話が自分からやって来たのであった。
「男爵」
若い大使館のスタッフが彼のところにやって来た。
「あの方が来られました」
「あの方が」
「はい」
スタッフは男爵の言葉に頷く。すると男爵だけでなく四国の外交官達の顔色も変わってきた。
「来られましたな」
「ええ、遂に」

彼等は顔を見合わせてそれぞれ話をはじめた。仲良くというよりは互いに抜け駆けを許さない、そうした感じで話を進めていた。
「グラヴァリ夫人が来られるとはな」
男爵はあの方の名をここで口にした。
「それでどうされますか？」
「まさかお断りするわけにもいくまい」
そうスタッフに述べる。
「何しろ我が国最大の富豪だ。若しも機嫌を損ねたら」
「大変なことになりますからな」
「そうだ」
彼は言う。

第一幕その三

「だからだ。いいな」
「わかりました」
スタッフもその言葉に真剣な顔で頷く。
「それでは」
「うん、御呼びしてくれ」
スタッフを呼びに行かせる。男爵はあれこれと周りに指示を出して場を整えさせる。四国の者達はなおもあれこれと話をしていた。
「そういえば貴国は公国にかなりのＯＤＡを」
「貴国は援助を」
日中の外交官同士が言い合う。
「貴国は帝政の頃から縁がおありで」
「貴国はロビイストで公国の方が多いとか」
今度は米露が。日米でも日露でも米中でも中露でもそれぞれ言い合う。大国である彼等は公国と何だかんだで関係があるようである。実は彼等がここに来ている理由はそれなのだ。
「あの四国に注意してくれ給え」
男爵はそｔっと秘書に囁く。
「グラヴァリ夫人の財産を狙っているから」
「援助の代金としてですか」
「そうだ」
男爵は秘書に答える。
「日本はある程度で済ませてくれるだろうが後の三国はな。丸々持って行かれると」
「それは大変です」
秘書はそれを聞いて顔を顰めさせる。
「そういえばオーストリアの方はここにはおられませんな」
「かわりにあの四国だ」

「迷惑な話です」
「だからだ。いいね」
真剣な顔で秘書に囁く。
「間違っても夫人をあの四人の誰かに渡さないように。さもないと我が国は破産だ」
「わかりました」
どうやら夫人の財産は公国を左右する程のものであるらしい。だからこそ男爵はそれの確保に躍起になっているのだ。当然四国も。彼等は彼等で事情があるのだ。
「それでは皆さん」
日本の外交官が言う。彼が音頭を取り三人がそれに応える。
「はい、伊藤さん」
「宜しいですかな、マックリーフさん」
「はい」
アメリカの外交官が頷く。
「李さん」
「ええ」
今度は中国の外交官が。
「グリーニスキーさんも」
「約束は守りますぞ」
ロシアの外交官が答える。その後で日本人はまた音頭を取るのだった。
「はい、それでは抜け駆けはなしで」
「勝利者が類稀なる未亡人と」
「財産を祖国にもたらし」
「それを公国との友好の証とする」
随分と虫のいい友好の証だが彼等は本気だった。そこにスラブ風のドレスを着た長身で気品のある顔立ちの美女がやってきた。
「グラヴァリ伯爵夫人が来られました」
「おおっ」

彼等はその夫人を見て感嘆の声をあげる。青い目は湖の如く澄んで黄金色の髪は黄金をそのまま溶かしたようであった。気品のある顔立ちはその生まれを感じさせスラブ風のその白いドレスが実によく似合っていた。四国の外交官達は彼女を見て思わず近寄ってきた。

「何とお美しい」

「これはまた」

「有り難うございます」

流麗なフランス語で挨拶を返す。その笑みもまた気品のあるものであった。

「けれど私はポンテヴェドロの田舎娘。そのような賛辞は」

「いやいや」

「そんなことはありません」

彼等はそれでも言う。

「この様な美しい方は」

「全くです」

「やっぱりな」

男爵は四国の者達を見て顔を顰めさせていた。

「大金持ちの未亡人、しかも美女と来ては」

「男が言い寄らない筈がありませんか」

「そうだね」

秘書に対して応える。クラヴァリ伯爵夫人、ハンナはクラヴァリ伯爵の未亡人である。若くして資産家の老人と結婚したのだがその夫が程なくして死んだのだ。それで今や公国きっての資産家となったのである。その彼女の美貌と財産を狙って四国がわざわざ来ているのだ。

「だからこそ」

「わかっています」

秘書は男爵の言葉に頷く。

「だからこそ」

「警戒しよう」

彼等の言葉をよそに四国の者達はハンナに相も変わらず言い寄っている。しかしそれでも彼女は慇懃に彼等の誘いをかわし続けている。

第一幕その四

「御世辞は我が国ではあまり」
「いえいえ、お世辞ではありません」
ロシア人が言う。
「本当の言葉ですぞ」
「左様」
日本人がそれに頷く。
「私もです」
「日本の方は慎み深いと聞きましたが」
「では私とダンスを」
日本人をかわすとそこにアメリカ人がいた。
「御一緒に」
「いえ、お茶でも」
そこに中国人が入る。
「如何でしょうが」
「折角ですが」
しかしハンナはにこやかな笑みでそれもかわし四人の誘いを全て断った。そうしている間に男爵のところに男爵夫人が来て何時の間にかカミーユも何食わぬ顔で来ていた。男爵は四人を離す為に夫人と共にハンナのところに来た。
「奥様」
四人を牽制するように声をかける。
「宜しいでしょうか」
「これは男爵」
ハンナは男爵に顔を向けてきた。ここでほっとした笑みを見せる。
「申し訳ありません。挨拶が遅れました」
「いえいえ」
男爵は笑って彼女に応える。そのうえで言う。

「それでは奥様」
そっと手を出してきた。
「踊りましょう。折角の宴ですし」
「はい」
「それではあなた」
ヴァランシェンヌこと男爵夫人は何食わぬ顔で夫に対して言う。
「私はロジョンさんと」
「うん」
夫としてにこやかにそれに応える。カミーユがそっと出て来て手を差し出す。
「では奥様」
「ええ」
にこやかに笑ってそれに応える。四国の者達はここでカミーユと男爵夫人を見てヒソヒソと話をはじめた。実は彼等は気付いているのである。
「御主人は気付いていないようですな」
「どうやらそのようで」
「しかしこれは何時か」
「面白いことになりそうですね」
音楽が奏でられ踊りがはじまろうとする。しかしここで金髪を見事に後ろに撫でつけ凛々しい顔をした長身の男がやって来た。タキシードを着ているが軍服も似合いそうな男であった。碧眼からも端整な光が放たれている。
「おお、閣下」
「間に合われましたな」
「うん」
大使館のスタッフ達に応える。彼こそこの公国のフランス駐在大使であり伯爵でもあるダニロ＝ダニロヴィッチである。彼は宴の場に入るとちらりとハンナを見た。
ハンナも同じである。お互い何か言いたげだったがそれは決して

口には出さない。口には出さないまま話をすることもなくダニロは男爵に対して言ってきた。
「戻って来たが。随分楽しい宴になっているね」
「はい」
男爵はにこやかに笑ってダニロに応える。
「その通りです」
「夜は外交官にとって大切な時間」
ダニロはここで言う。
「おしゃべりは禁物で書類はいつも山積み。仕事をしなければならないのに仕事にはいつも巻き込まれる」
「そうなのですか？」
「さあ」
四国の者達はダニロの言葉に首を傾げさせる。
「外交はのらりくらりとすればいいのに」
日本人の言葉である。
「強引に押し通せばいいのに」
他の三国の言葉である。
「巻き込まれるものではなく巻き込むもの」
「そうである筈なのに」
これは四国の事情であり公国の事情ではない。大国と小国ではそこも違うのだ。
「夜に私はマキシムに出掛けて楽しく過ごします。そうして英気を養い一旦は祖国を忘れてまた祖国に戻る。いやいや、これが中々大変でして」
「それで閣下」
そこまで聞いて男爵はダニロに声をかけてきた。
「何かな、男爵」
「早速パーティーの主催を」
「いや、ちょっと待ってくれ」
だがここでダニロは手も使って制止してきた。

第一幕その五

「少し休みたいんだ」
「はあ。そうですか」
「とはいっても」
ここで宴の場を見回す。そうしてこ待った顔を浮かべる。
「机がないね。困ったことに」
「机！？」
「何故そんなものが」
四国の者達はそれを聞いて思わず目をしばたかせる。ダニロは彼等に対しても言うのであった。
「いや、これは簡単なことで」
「簡単なこととは」
「私は便利な体質でして。事務用机を見ればもうそれだけで」
「それだけで？」
「眠くなってしまうのです」
「何と」
これには四国の者達は流石に驚いた。幾ら何でもそれはないだろうと思った。
「それでは閣下」
男爵が隣の部屋の一つを指し示してきた。
「あちらへどうぞ」
「おお、いい机があるね」
そこに机があるのを見て言ってきた。
「これはいい。それじゃあ」
「はい、ごうぞごゆっくりと」
「うん」
彼はすぐに部屋へと向かう。結構上機嫌な顔であった。扉を閉めるとすぐにいびきが聞こえてくる。四国の者達はそれを聞いて首を

傾げるばかりであった。
「あんなので大丈夫なのですかな」
「さて」
とても大丈夫とは思えない。他人事ながらこの国の外交が心配になったりもしていた。
それと入れ替わりにハンナが部屋に戻って来た。あれこれと公国の外交官達と雑談に興じていたらしい。割かし機嫌よく帰ってきた。
「あら！？」
部屋に帰るとあることに気付いた。
「大使がおられた筈だけれど」
「ええ、先程までは」
男爵がそれに答える。
「ところが今は」
「何処なの？」
「ゆっくりとお休みです。あちらの部屋で」
そう述べて扉の方を指差す。
「ごゆっくりと」
「実はですね」
ここでハンナは真顔を作って言う。
「大使に御用がありまして」
「おや、何事でしょうか」
「火急の用件です」
真面目な顔で言うと説得力があるように見える。見えるだけだが。
「御呼びして下さい」
「わかりました。それでは」
公国きっての資産家の言葉なぞ無碍にはできない。すぐに部屋の中に向かいダニロを呼ぶ。起こされた彼は不機嫌な顔で部屋に戻って来たのであった。
「一体どうしたんだい？」
不機嫌な顔で部屋に来て問う。

「折角気持ちよく寝ていたのに」
「実は閣下に御会いしたい方がおられまして」
「美人かい？」
「とびきりの」
男爵も洒落てそう言葉を返す。
「如何でしょうか」
「美人ならいいよ」
伊達男を気取って応える。確かに容姿はまあ伊達男である。もっとも本当の伊達男とは自分でそれを信じて演じきれる男のことなのであるが。
「それで誰だい？」
「こちらの方です」
男爵が指し示したのは当然ハンナである。ダニロは彼女を見て顔を強張らせる。
「悪いけれど急に眠くなったよ」
「いえ、そんな」
戻ろうとするダニロを必死に止める。
「そんなことを仰られても」
「僕には関係のない話みたいだし」
「いえいえ、それがあるのですよ」
しかし男爵はこう言うのだった。
「これがですね」
「どうあるんだい。僕にはないよ」
「何と勿体ない」
「全く」
四国の男達はダニロの言葉を聞いて半ば憤慨して呟いている。

第一幕その六

「そんなことを仰るとは」
「とにかく僕はだね」
「閣下」
ハンナはあえて他人行儀を作ってダニロに声をかけてきた。
「私今悩んでいまして」
「それは大変です。神父様に相談をされては」
「それは後で」
澄まして言葉を返す。
「実は。ある大切なことを考えておりまして」
「何をですかな？」
「結婚です」
「むっ」
「何と」
その言葉を聞いて皆緊張を走らせる。これこそが誰もが狙っていることだからだ。
「ほう」
ダニロは微妙に表情を変えながらそれに応える。
「それはいいことですな」
「ですね。それでですね」
ダニロをじっと見て言う。
「この楽しいパリで。どなたかを選ぼうかと」
「ふむ。しかしですな」
ハンナの視線を感じながらもあえてとぼけて言うのだった。
「私は結婚は一度だけにしたいものです」
「さて」
ハンナはその嫌味に口の端だけをひくつかせながら応えてきた。
「それは何のことでしょうか」

「奥様。私の伯父は」
それが他ならぬグラヴァリ伯爵であったのだ。中々複雑なものである。
「平民の娘を愛され。そうして」
「結婚して。その日のうちになくなってしまいましたわね」
「残念なことです。式の直後で」
「それはまた早い」
「夜にならないうちにとは」
四国の者達はそれを聞いて言う。
「私は人妻には興味はありませんので」
「未亡人は？」
「明るい女性が好みです」
「明るい未亡人なら？」
「それでも人妻ではないですか」
とぼけながらハンナに対して言葉を出す。ハンナも引き下がらない。
「私はそういうことには五月蝿い男でありまして」
「わかりました。それでは」
ハンナも気取ってそれに応える。後ろで二人のやり取りを見守っていた。四国の者達に顔を向ける。それからゆっくりと微笑みを送ってきたのだった。
「どなたか御一緒しませんか？」
「それでしたら奥様、私が」
そっと中国の男が出て来た。
「いえ、私が」
続いてアメリカの者が。
「いえいえ、私が」
「私なぞは」
ロシアと日本の男達も。四人はかち合ってそこから顔をお互いに見合わせてきた。

「抜け駆けはいけませんな」
「いえ、これはそうではありません」
彼等は言い合う。
「これは恋でありまして」
「そう、何を隠そう私も」
「私もですぞ」
ハンナはそんな四人のやり取りを楽しそうに見守っている。男爵はここでそっとダニロにまた囁いてきた。
「あのですね、閣下」
「あの四人の方々なら安心していいよ」
笑って男爵に対して言う。
「お互いに牽制し合って動けないから。何時でも何処でもそうなんだな」
「あのですね、彼等はどうでもいいのです」
困った顔でまたダニロに述べる。
「いいのかね」
「はい、それよりも我が国です」
こう囁いてきた。
「宜しいですか？」
「あまり」
「そんな風に仰らずに」
冗談めかすダニロにきっと真面目な顔で囁く。
「あの方々だけではありません。ここはパリですよ」
「もう誰でも知っているよ」
「それでです。パリの男といえば」
軟派男ばかりだと言いたいのだ。パリジャンといえば昔から遊び人で女好きと決まっている。ジゴロといえばフランスでありパリだ。男爵の危惧はハンナに対して向けられていた。

第一幕その七

「グラヴァリ夫人もまた」
「あのね、男爵」
ここでダニロは言う。
「僕の哲学は知ってるかな」
「私の専攻は政治学でしたのでそれは」
首を横に振ってみせる。
「それに閣下は士官学校だったのでは？」
「だからだよ。モットーなんだ」
こう言い換えてきた。
「女には惚れてもいい。婚約はたまに、けれど結婚は」
「結婚は？」
「絶対にするな」
「面白くないジョークですな」
男爵はそれを聞いて憮然とした顔になる。
「生めよ満ちよ」
それから聖書の言葉を出してきた。
「そうではなかったのですかな？」
「確かね」
唯物史観でも何でもないがその言葉にもとぼけてきた。
「それでも僕は自分からは動かないよ」
「それはまた困ったことです」
目を顰めさせ憮然とした顔で言う。
「こうしたことは御自身から」
「そうだったかな」
「そうなのです。ですから」
何とかダニロに言わせようとする。かなりの努力と忍耐を使って。
「ここは」

「どうしろと？」
「最後まで言わずともわかる筈ですが」
「いや」
男爵の言葉にまた首を振る。
「わからないけれど」
「御冗談を。いいですかな」
「おっと、またお客さんだ」
男爵にとって都合の悪いことにまた客が来た。パリの踊り娘達である。
「マキシムの娘達だよ」
ダニロは笑顔で男爵に説明する。
「僕の行きつけのね」
「左様ですか。これはまた」
あでやかな美女達ばかりである。そうしてにこやかな笑みをたたえている。
「さあ、男爵」
ダニロは彼にも声をかける。
「卿も踊り給え」
「いえいえ、私は」
ここで彼は誇らしげに言ってきた。
「妻がおりますので」
「それでいいのかね」
「はい、そうです。だからこそ」
「だといいがね。じゃあ僕は」
「どうしますの？」
ここでまたハンナが出て来た。
「御婦人が大勢いらっしゃいましたけれど」
「さて」
ダニロは彼女に対してとぼけてみせる。
「どうしましょうか」

「一人空いていますが」
「それは皆さん同じこと」
またそう言ってとぼける。
「では。誰にしようか」
「これは抜け駆けではありませんな」
「そうですな」
四国の者達はお互いそう言い合って必死に美女を物色していた。
「誰がいいのか」
「さて、選り取りみどり」
「全く」
カミーユはそんな彼等を見てシニカルに笑っていた。
「やはり余所者にはフランスの美女に溺れてしまうようだな。慣れていないとそれに溺れる」
笑いながら言う。
「僕のように全てを遊ばないとね」
「いやいやこれはまた」
「お美しい」
その前で四国の者達は相も変わらず楽しい思いをしようと躍起になっていた。
「実は我が国はですな」
「貴国とはかねてより」
「ああした欲の皮が突っ張った方々はともかくとしまして」
男爵は妻を隣に置きながらダニロにまた言っていた。
「閣下、貴方は是非共」
「政治的な理由でかい？」
「といいますと」
「確かにね。僕は貴族だ」
政略結婚が当たり前の社会である。これは今でも同じだ。
「しかししがらみはできるだけ減らしたいとも考えている」
「それでは閣下、伯爵夫人とは」

「気楽にいきたいんだよ」
そう男爵に述べる。
「わかったかね、それで」
「まあそうね」
それを聞いてハンナも言う。
「私は政治はどうも」
「ちょっと、奥様」
男爵はハンナまでもが言い出したのでいよいよ慌てだした。
「そんなことを仰られると」
「お待ちになって下さい」
しかしハンナはそのにこやかな笑みでまずは男爵を制止してきた。

第一幕その八

「政治は殿方の御心を悪くさせて女の魅力を失わせますわ」
「そうでしょうか」
「恋はあくまで恋」
そう主張する。
「ですから」
「楽しみましょう」
「しがらみなぞ忘れて」
マキシムの娘達はこう言う。
「さあ皆さん」
「楽しく」
そう四国の男達に述べる。彼等はもう鼻の下を長くさせていてそのつもりになっていた。
「いや、全く」
「左様で」
「またえらく単純だね」
カミーユはそんな彼等を見て呆れたように呟く。
「どうしたものだろう」
「閣下はどうされるのですか？」
ここで彼女達はダニロにも楽しげに声をかけてきた。
「私と一緒に踊って頂けますか？」
「それとも私と」
「そうだね」
遊び慣れている彼はにこやかに彼等に応える。ちらりとハンナの方を見やりながら。
「どうしようかな」
「まあ遊びですので」
秘書が横から言う。

「誰でも宜しいですが」
「おや、政治的に言うつもりかい？」
「いえ」
秘書はそれには首を横に振る。一応はそうではないと述べてきた。
「ただ。御気をつけを」
「ふふふ。それじゃあ」
「さあ」
ハンナもハンナでその場にいる者達に対して述べてきた。
「ワルツを。どなたか」
「張るには花の咲くように、色とりどりに咲くように甘いワルツの響きを」
ダニロは楽しげに歌う。
「ヴァイオリンの音はあでやかにまた情熱込めて歌う時」
「閣下」
「それは一体どなたの歌で」
「祖国の民謡です」
そう四国のものに答える。
「わりかし新しい曲でしてね。如何でしょうか」
「いや、素晴らしい」
「奇麗な曲ですな」
四人はそれに頷く。酒と美女のせいだが先程よりもさらに機嫌をよくさせている。
「誰が踊らずにいられよう。若者よ、たじろぐことなく情熱込めて踊るのだ。踊ることこそが君の甘い務めなのだから」
「ささ、伯爵もそう仰っていますし」
「皆さん」
またマキシムの女達が皆を誘う。
「甘いワルツと共に」
「憂いなぞ消し去って」
「夜の仕事は楽しく」

ダニロはまた歌う。
「朗らかに」
「できればお昼もそうして欲しいものですが」
「全く」
秘書と男爵はこっそりと話す。しかしダニロは一切気にはしていない。これが彼のやり方なので当然と言えば当然であった。
「選ばれないのですね」
男爵夫人はそんな中でハンナにそっと囁いてきた。
「御自身では」
「選んで頂けないと」
彼女もまたちらりとダニロを見て言う。
「意味がありませんわ」
「そうですわね。けれど私は」
にこりとカミーユの方を見た。それから手をゆっくりと差し出す。
「カミーユさん」
彼の名を呼んだ。
「宜しいでしょうか」
「はい」
カミーユは笑顔でそれに応える。こっそりと彼女の目を見詰める。
「私でよければ」
その手を受け取って言う。
「御願いします」
「この方はポルカがお上手ですの」
彼の手を握ってハンナに述べる。
「そしてマズルカも。右へも左へもステップされて」
「本当にお上手なのですね」
「ええ。それに今からはじまるワルツだって」
「奥様、あまり褒めないで下さい」
まんざらでもない笑顔で男爵夫人に言う。
「照れてしまいます」

「あら、これは失礼」
男爵夫人も思わせぶりに笑ってそれに返す。
「それでは」
「ところで奥様」
カミーユは真面目な顔でハンナに言ってきた。
「何か」
「鞘当ては女性がするもの」
こう言うのだった。
「それはお忘れなく」
「え、ええ」
少し戸惑いながらそれに応える。
「わかりましたわ。それでは」
「はい」
二人はそのままカップルになる。すっぽかされた男爵は仕方なく踊り娘の一人と組む。何か周りからは何があるかわかるような流れであった。

第一幕その九

四国の者達も秘書も他の客人達も踊る用意を整えていた。しかしダニロだけは相変わらず一人で平気な様子を装って立っているだけであった・

そんな彼にまた秘書が声をかけてきた。

「幾ら何でも主催の方がそれでは」

「僕も自分からは声はかけないよ」

「僕も？」

「いや、失礼」

またハンナをチラリと見てから言い変える。

「僕は、だったね。御免御免」

「それではずっと御一人でおられるおつもりですか？」

「さて、どうしよう」

「どうしようって閣下」

困った顔でダニロに言ってきた。

「あまりそうふざけられてはですな」

「別にふざけてはいないけれど」

「ふざけています」

口が咎めるものになってきていた。

「全く。何を考えておられるのか」

「別におかしなことは考えていないよ」

「それならばです」

さらに言ってきた。

「もう少しですな」

「まあまあ」

ここで何気ないのを装ってハンナがやって来た。

「秘書さんもそんなに怒られることはないではありませんか」

「奥様」

「私はパートナーにですね」
ここでまたダニロを見る。
「私を構わないふりをしておられる方を」
「誰でしょうか」
またダニロはとぼける。
「その方は」
「さあ」
ハンナも負けじととぼけてきた。
「どなたでしょうか」
「誰かわかりませんが意地っ張りのようで」
「全くです」
微かに火花を散らしながら言い合う。
「私としては奥様と踊る権利を」
「私と踊る権利を？」
「一万フランで誰かにお売りしましょう」
「何っ、一万」
「それはまた」
皆それを聞いて動きを止めて口を動かしてきた。
「閣下、本気ですか！？」
「勿論だよ」
笑顔で男爵に答える。
「だからね。心配しないで」
「心配どころじゃないですよ」
男爵は困った顔でそう言い返す。
「また突拍子もない」
「だからいいんじゃないか。そういうのが面白いんだよ」
「私はそうは思いません」
男爵は今度は憮然とした顔で述べてきた。
「そんなものを受け入れる人が」
「やっぱりいないか」

「当然です」
きっぱりとダニロに答える。
「全く。何かと思えば」
「そういえば誰も名乗りをあげないな」
四国の者達まで見回して言う。
「彼等の国では大した額じゃないと思うけれどね。大国なのだろう？」
「大国とかそうした問題ではありませんから」
またダニロに告げる。
「それだけの額を遊びに使うなぞ」
「おや、そういえば」
ダニロはここでまた楽しそうに言う。
「夫人は何処かへ」
「私の妻ならここに」
「いやいや、伯爵夫人だよ」
笑ってそう男爵に言葉を返す。
「ほら、いないね」
「まあ当然でしょうね」
顔を思い切り顰めさせてダニロに対して言ってきた。
「とんでもない侮辱ですから」
「ふん」
「それにです」
彼はさらに言う。
「皆帰っていますよ。場が醒めたから」
「いいじゃないか、静かに眠れる」
「外交的にはとんでもない失敗になりますが」
「いやいや、すぐに挽回できるよ」
しかし彼はこう言って平気な顔をしたままである。
「すぐにでもね」
「だったらいいのですがね」

「あなた」
男爵に妻がそっと囁いてきた。男爵はにこやかな顔になって妻に問う。
「何だい？」
「私達もそろそろ」
「おっとそうだね、それじゃあ」
「それじゃあね」
ダニロの方から彼に別れを告げる。
「また明日」
「今後どうなっても知りませんから」
男爵は去り際にこう釘を刺してきた。
「いいですね、どうなっても」
「どうなってもこうなってもなるがままになるさ」
「貴方も私も更迭されますよ」
「そうならないようにはするさ」
相変わらずの涼しい顔で返す。
「じゃあお休み」
「お休みなさいませ」
ダニロには思いきり剣呑な顔を見せる。しかしその顔は妻に対しては非常ににこやかな顔になるのだから実に不思議なことではある。
「じゃあヴァランシエンヌ」
「ええ」
夫婦仲良く帰る。妻のことには全く気付いていない。
場はあっという間に掃除され整理され奇麗なものになる。ダニロは一人そこに佇んでいたがそこにハンナが不機嫌そのものの顔でやって来た。
ダニロは涼しい顔で彼女を見ている。それからしれっとした顔でこう言ってきた。
「解放されましたよ」
「そうね」

声も不機嫌そのものだった。その声で言う。
「よくもまあこんなことを」
「何かあるのかい？」
「けれどあの時僕と踊るつもりじゃなかったんだよね」
「相手は一人しかいなかったじゃない」
ハンナは憮然としてそう返す。
「しかも一万だなんて。誰も払わないわよ」
「僕はその一万を今この手に持っているよ」
そう言いながらそっとハンナの後ろに来た。そうして彼女の顔を覗き込もうとする。
しかしハンナはその顔をさっと逸らす。まるで遊ぶかのように。
「さて、この一万だけれど」
「演奏は何もないわね」
「演奏は無くても踊れるさ」
ダニロはそう言ってきた。
「そうじゃないかい？」
「では伯爵」
他人行儀に声をかけてきた。
「そのお手を」
「ええ」
ダニロはそっと手を差し出す。ハンナもまた。
何もない、演奏も舞台も何もない場所で踊りだす。ハンナはじっとダニロの顔を見ていた。
「とても酷い人だけれどダンスは相変わらずね」
「一人で踊る機会が多かったからね」
ここで二人は微かに笑い合う。しかしそれはあくまで微かで。まだ本気ではなかった。

第二幕その一

第二幕　騒ぎは大きく

「さあさあ皆さん」
今度はハンナのパリの邸宅で。何やら皆集まっていた。
公国の人間もいればフランス人もいる。当然ながらあの四国の四人もいた。
「ふむ、これはこれは」
ロシア人は興味深い顔で邸宅の中を見ていた。邸宅はロシア風だ。
「いい御趣味だ。流石はグラヴァリ伯爵夫人です」
「しかも車はキャデラック」
アメリカ人は玄関の車に対して言う。
「よい目をしておられる」
「いや、この壷は何と」
中国人は自国の壷を見て笑みを浮かべている。
「我が国のもの」
「日本のものはありませんか？」
日本人は少し不安げに公国のスタッフに尋ねていた。公国のスタッフは笑顔で言う。
「これなぞが」
「おお、これはいい」
日本人は食器を見て目をその食器と同じ形にしていた。
「よくぞこれだけのものを」
「さあ皆様」
着飾ったハンナが客人に対して言う。
「今宵が歌って騒いで。楽しく」
「ミヴェリモダーセ」
集められた合唱団が楽しげに歌いだした。
「ミヴェリダモーセ、ダーセ、ハイアホ！」

「これはヴィリアの歌ですの」
ハンナはにこやかな顔で客達にこの歌を紹介する。
「ヴィリアの歌ですか」
「はい」
「さあ歌い騒ごう。さあ歌い騒ごう」
その曲を背にハンナはさらに言う。
「昔ある森にヴィリアという妖精がいたのです。若い狩人が彼女に一目惚れをして」
「それで？」
「それで訴えたのです。こう」
「ああ、ヴィリア」
ここでまた合唱団が歌う。
「ああヴィリア森の妖精よ、私を捕まえて御前の恋人にしておくれ」
「ヴィリアよ御前どんな魔法をかけたのだ」
ハンナも歌いだす。
「恋の病の男は訴えました。するとヴィリアは」
「ヴィリアは！？」
「人になって生涯の伴侶となったのです。妖精から人になって」
「奇跡が起こったと」
「そう、奇跡が」
また客人達に答える。
「そうして二人は末永く幸せになったのです」
「ヴィリアよ、森の妖精よ」
また合唱団が歌う。
「私を御前の恋人に」
華やかな歌が場を支配する。その中で男爵は秘書と共に宴の中をしきりに見回していた。
「閣下は来られているよな」
「はい」
秘書は彼の言葉に応えて頷く。

「確か」
「しかしどちらに？」
「それは私も聞きたいことです」
秘書は畏まって男爵に言ってきた。
「全世界がそれを確かめたいと思っています」
「いや、それは嘘だろう」
流石にそれは笑って否定する。
「私達だけだよ、それは」
「その私達が困っています」
秘書は今度はこう言ってきた。
「閣下が何処におられるのか」
「閣下はいつも急に現われたりされるからな」
男爵は首を傾げて言う。
「いつも」
「そうだね」
ここで誰かの声がした。
「いつもね」
「そうなのですよ・・・・・・ってこの声は」
声がした右の方を見た。するとそこに彼がいた。
「閣下、探していましたぞ」
「僕はさっきからここにいたけれど？」
「またそのようなことを」
顔を見合わせてそれを否定する。
「ふざけられては困ります」
「全くです。宜しいですか、閣下」
秘書も口を尖らせて言ってきた。
「そもそも閣下は」
「実は面白い話を聞いてね」
ダニロはここで話題を転換させてきた。
「面白い話！？」

「あのフランスの外交官」
「ああ、カミーユさん」
「そのカミーユ君が恋をしているみたいだね」
「そんなことですか」
男爵はそれを聞いてがっかりした顔になった。
「誰だって恋はするでしょう」
「ところが相手はどうやら人妻らしい」
「それもまたよくあることでは？」
男爵はそれを聞いても平気な顔であった。自分のことだとは全く思わない。

第二幕その二

「フランス人ですから。女性で美しければ誰でも」
「それは偏見ではないかい？」
「いえいえ」
笑ってダニロの言葉に首を横に振る。
「かつては王様御自ら励んでおられたではないですか」
国王自ら盛んに不倫をしていた、フランスでは事実だ。アンリ二世とディアヌ＝ド＝ポワティエもそうであるしフランソワ一世も太陽王ルイ十四世もだ。フランス王は好色な王が多かった。
「そんな歴史がありますから」
「まあサルトルもデュマもね」
そのうえ哲学者や文豪も。お盛んであった。
「フランス人はそうだね」
「そうですよ。何を今更」
彼は笑ってダニロに言う。さらに調子に乗って言葉を続ける。
「しかし亭主は馬鹿者ですな」
まさか自分だとは思いも寄らない。
「妻にあっさりと欺かれて。私でしたらな」
「どうするのかね？」
「ロジョンさんにお勧めします。何でしたらその人妻を自分の奥方にしなさいと」
「ほう、それは大胆な」
ダニロもその話を面白そうに聞く。
「とんでもない背徳だね」
「背徳だからこそいいのでしょうな」
男爵は完全に他人事で言う。
「そうすればロジョンさんは伯爵夫人に言い寄ったりしませんし」
「結局はそれなんだね」

「左様、できればですな」
「うん。何かな」
「伯爵夫人です」
ここを強調してきた。
「そして閣下は伯爵」
「うん、それで？」
「釣り合いが取れているではありませんか」
今度は爵位を出してきたのである。いきなりダニロに奇襲を仕掛けた形だ。
「違うでしょうか」
「そうかな」
しかし彼はそれには惚けてみせてきた。
「僕はそうは思わないけれど」
「それは閣下がそう思われているだけで」
男爵も強引に言葉を進める。
「実際はそうではないのでして」
「といっても何故か彼女の周りに最近よくいるね」
「よいことです」
ダニロに対して微笑んでみせる。
「できればこのまま」
「いやいや、僕はね」
「何ですの？」
ここにハンナがやって来た。そのうえでダニロに声をかけてきた。
「何やら楽しそうなお話。大使閣下は何をお楽しみかしら」
「お酒を楽しんでいます」
手にしているカクテルを見せて応える。
「これは中々」
「左様ですか。それはいいことです」
「いや、美酒は実にいいものです」
カクテルを手にまた言う。

「これさえあれば世の中は最高のものになります」
「お酒だけで満足ですか？騎士殿」
「はい、満足です」
ハンナの声の突きをまずはかわした。
「到って」
「欲がないこと。娘達は騎士殿を品定めしてそこから何かを見つけないといけないのに」
「大変ですな、それはまた」
「女性は皆娘ですわよ」
そっと自分も含めてきた。
「騎士殿が戻って来られればそっと捕まえて」
「そして？」
「その方を生涯の伴侶に」
「いやいや、騎士というものは気紛れです」
じっと自分を見てきたハンナに対して頓智めいて言い返す。
「嫌ならすぐにお別れですね」
「あら、薄情な」
「人間とはそういうものです」
彼はあえてこう言う。
「騎士もまた」
「騎士は娘を護るものではなくて？」
「それではどうすれば」
「手を差し出せば」
ここでさっと手を差し出す。

第二幕その三

「その手を握って下さって」
「そして？」
「護って下さるものだと存じていますが」
「ふむ。ですが奥様」
ダニロはまたハンナに言い返す。言葉のやり取りは微妙に棘もある。
「敵ならば」
「娘が敵だとも？」
「隠れているかも知れません。そう」
悪戯っぽくハンナを見て述べる。
「娘の仮面を被って。そして」
「そして？」
「騎士を自分のものにしてしまおうと狙っているのですよ」
「賢い娘さんですこと」
ハンナもまたとぼけてきた。
「そんな娘さんがいたら私ならば生涯の伴侶ですわね」
「おや、娘さんが敵なのですか」
「さて」
またしてもとぼける。
「そうであるかも知れませんしそうでないのかも」
「見抜く目が必要だと」
「そういうことですわね。さて、それでは」
じっとダニロの目を見てきた。ダニロも彼女の目を見る。二人は目で対峙するのであった。といっても双方共目は笑っていた。
「どちらでしょうか」
「奥様」
しかしここでハンナを呼ぶ声がした。

「はい」
「どうぞこちらへ」
「あら、左様ですか。それでは」
「ええ」
ダニロとは芝居めいて挨拶をして一旦別れた。ダニロは公国の若い娘達にしきりに声をかける四国の男達を背景に一人佇む。そこにまた男爵がやって来た。
「何か色々とお話中でしたな」
「大した話ではないよ」
ダニロは彼にそう答える。
「別にね」
「それがいけないのです。しかしまあ」
ここで少し呆れ顔で後ろを見て四国の男達を見る。鼻の下を伸ばしている彼等を見て少し溜息をついて述べるのであった。
「あの方々はまた。相変わらずですな」
「大国であればある程あれだね」
ダニロは少しシニカルに述べる。
「欲深くなるね、何事も」
「全くです。といいますか」
男爵も言う。
「あんなので真っ当な外交ができているのでしょうか」
「答えはもう出ているじゃないか」
ダニロは四人に聞こえないようにして男爵に言う。
「彼等の外交を見れば」
「確かに」
男爵もその言葉に頷く。
「見事な外交をしておりますな、全く」
「伯爵夫人も彼等には興味はないしね」
「それは何より」
「女がわからないと何もかもわからない」

哲学めいたドンファンな言葉を述べてきた。
「当然外交もね」
「では女に溺れれば」
「よく言うじゃないか。女は遊ぶもの」
これもまたドンファンである。といってもダニロの今の言葉には影はないが。
「だからね。今度もまた」
「左様ですか。それでは彼等はあれですな」
相変わらずな四人を見て男爵も言う。
「外交に溺れていると」
「そういうことだね」
「言ってくれること」
そこにハンナが戻ってきていた。そうしてダニロの得意げな言葉を聞いて顔を顰めさせて独り言を呟いていた。
「けれど。見ていらっしゃい」
また呟いてから何気ない顔でダニロの方に来た。そのうえで彼に問う。
「閣下」
「はい」
ダニロも平静を装って彼女に顔を向けてきた。そうしてやり取りを再会する。
「何でしょうか」
「私、実は悩みがありまして」
「悩みですと」
そこにいた男爵が思わず身を乗り出してきた。
「それは一体」
「まあまあ」
しかしダニロが彼を制止する。
「お悩みですか」
「そうです。実はですね」

ここで芝居がかってわざと深刻な顔で述べる。

第二幕その四

「あの」
しかしその前にそっと男爵の方を見る。ダニロもそれに気付く。
「左様ですか。それでは」
彼も男爵に顔を向ける。そのうえで言う。
「卿は少し席を外してね」
「わかりました。それでは」
「うん」
こうして男爵は席を外し二人だけになった。周りはもうめいめいで勝手にやっているので誰も二人に顔を向けない。騒がしいが二人にとっては秘密の話にいい場所になっていた。
「それで。何でしょうか」
「私、実は」
ここでダニロの顔を見る。
「結婚を考えていまして」
「ほう」
ダニロはそれを聞いて声をあげる。
「それはどなたでしょうか」
「貴方もよく御存知の方です」
(上手く言ったものだ)
ダニロはその言葉を聞いて内心呟く。
(確かによく知っているな)
「私もですか」
しかし本心は隠す。そうハンナに問い返す。
「左様です。だからこそ御聞きしたいのです」
「それでは貴方の忠実な友人として」
仮面を被って言ってきた。
「その方とのことについて御聞きしましょう」

「妬かれないのですね」
「別に」
（何故妬く必要があるんだ）
また心の中で呟く。
（馬鹿な話だ）
（わかっている癖に）
ハンナも心の中で呟く。
（馬脚を現わさないというのならそういう風に仕向けてあげるわ）
そう言ってまた攻撃を仕掛ける。またダニロに言う。
「それでですね」
「はい」
「再婚前に考えていることがありますの」
今度はこう言ってきた。
「実はこのパリをよく見回りたいのです」
「ではいい地図を差し上げましょう」
「いえ、地図ではなく」
それは断ってきた。
「ガイドを紹介して頂きたいのですが」
「ああ、それなら簡単なことです」
ダニロは笑って応えてきた。
「フランス人でよく御存知の方が」
「私フランスの方は」
「御嫌ですか？」
「口には出せませんが」
嫌というわけである。勿論本音も何処となく含んでいる。
「ふむ。それでは」
「どなたですの？」
「我が国の大使館に詳しい者が幾らでも」
「それではですね」
応えながらダニロを見てきた。

「それも閣下に教えて頂きたいのですが」
「おや、そちらまで」
「如何でしょうか」
じっとダニロを見て問う。
「それで」
「悪くはありませんがただ」
「ただ？」
「まあ何です。ゆっくりお話しましょう」
いいムードになったところでそれをあえてかわしてみせた。ハンナもそれを感じて内心あまり面白くはなかったがやはり顔には出さない。
「そうですか。それでは」
「ええ」
「まあワルツでも」
ダニロはまた踊りに誘う。
「如何でしょうか。四分の三拍子に合わせて」
「合わせて？」
「貞節もそれだけ忘れて」
「閣下、生憎ですが私は」
今度はハンナがかわしてみせた。ダニロの言葉が自分に向けられているのは承知だ。
「その四分の一さえ惜しいのです」
「おや、それは身持ちの固い」
「そうですのでそれはお断りします」
「では私も今回はお勧めしません」
「ええ。それでは」
「はい」
そんなやり取りを続けていた。そんなことをしている間に邸宅の中の一室で何時の間にかカミーユと男爵夫人がこっそりと密会していたのであった。

「奥様、ここでしたら」
「あら、何でしょうか」
言い寄るカミーユに対して楽しげに顔を向ける。
「二人きりでお話できますね」
「けれど何故二人で？」
「お分かりだと思いますが」
夫人ににこりと笑って述べてきた。
「もう」
「さて、私は」
しかし男爵夫人はその問いにとぼけてみせてきた。

第二幕その五

「何も」
「おや、そんな筈が」
「何も思いませんが。それが何か」
「またそんな意地悪を」
「意地悪ではありませんわ」
楽しむ感じで彼から顔を背けて述べる。
「本当ですわよ。私は何もお話することはありません」
「それではですね奥様」
しかし彼も伊達にパリの男ではない。巧に人妻の心に入り込んでいく。彼女の耳元に近付いてきてそっと囁くのであった。
「頂きたいものがあります」
「それは何ですの？」
「思い出の品を」
彼は言う。
「何か頂きたいのですが」
「ではこれを」
夫人はそれに応えて自分の手に持っている淡い赤の扇を差し出してきた。そこには白く字が書かれていた。カミーユはそこに書かれている字を読んだ。
「私は貞淑な人妻です」
「そうです」
夫人もその言葉に頷いてみせる。
「ですから」
「それではこの文字は貴女から離れました」
こうきた。夫人もそれは読んでいる。
「これで貴女は」
「私は？」

「薔薇のつぼみが五月に咲くように愛の花が心に咲かれたのですよ」
「また御冗談を」
またしてもその言葉を笑って否定する。
「私の心は今も」
「幸福が芽生えた筈です。これまで気付かなかった不思議な夢が。私はそれに憧れます、しかし」
「しかし」
顔を向けたのも計算のうちであった。カミーユもそれがわかっていたのでさらに夫人に対して囁きかけるのであった。完全に狙いが当たったのだった。
「それと共に私は去らねばなりません。私の心の春の光は翳り、蕾は枯れてしまうのです」
「何と悲しいこと」
「そうです、私の心は悲しみに覆われます」
あえて悲観的に言う。
「ですがそれを避けることもまたできます」
「それはどうすれば」
「貴女の力が必要です」
じっと夫人の目を見詰めてきた。夫人も見詰め返す。
「貴女の力こそが」
「私の力ですか」
「そうです。奥様」
彼女の両肩に手を置いてきた。ドレスから露わになっている両肩に。
「ここで私と共に」
「貴女と共に」
「共に楽しい一時を。宜しいですか？」
「それでも私は」
「貞節は先程貴女から離れられたではありませんか」
ここで先程のことを出してきた。

「ですから貴女は」
「私はどうすれば」
「ここで私と共に」
「貴女と共に」
「楽しい一時を」
そのまま逢引に入ろうとする。しかしここで誰かが来た。
「ふむ。ここなのか」
「あの声は」
男爵夫人は今聞こえてきた男の声に眉を顰めさせる。他でもない、自分の夫の声だったからだ。
「いけない、このままでは」
「確かに」
カミーユもそれに頷く。
「早く隠れなければ」
「そうですわね」
「しかし間抜けな話だな」
男爵はここにカミーユがいることはわかっていた。しかしもう一人についてはわかってはいないままであった。本当に彼が言う通り間抜けなことに。
「何がですか？」
「だからその人妻の夫がだよ」
自分のことを何も気付かないまま秘書に対して言う。
「ここはパリだよ。フランス男がしたなめずりしている場所に自分の妻がいるのに警戒一つもしないなんて。狼に餌をやるようなものさ」
「狼ですか」
「フランス男は美女と美食と美酒に関しては狼さ」
実に欲張りな狼である、
「だから危険なんだよ。わかるかね」
「はあ」

「しかしまあ。誰なのか」
その人妻に対して思う。
「顔を見てみたいな」
「あれ、男爵」
ここでハンナと踊り終えたダニロがふらりとやって来た。
「どうしてここに」
「おや、閣下」
男爵も彼に顔を向けて声をあげる。
「どうしてこちらに」
「いや、少し涼みにね」
そう彼に答える。
「来たのだけれど一体何をしているんだい？」
「まああまり趣味のいいものじゃありません」
自分でもそれは自覚していた。

第二幕その六

「下世話なものです。カミーユさんが人妻に言い寄っていまして」
「ふん」
「その相手が誰か確かめてみようと。こうやって」
扉を指差す。そこの鍵穴から覗き見るつもりなのだ。
「確かめてみます」
「確かにあまり褒められたことじゃないね」
ダニロもそれに対してはこう言う。
「どうにも。しかし」
「はい」
「それも外交の一つだからね、弱みを握るのも」
「そういうことになります。おや」
ここで男爵は覗き見ながら声をあげた。
「これは」
「どうかしたのかい？」
「何か何処かで見た奥方です」
「公国の誰かかな」
「そのようです。けしからんことですな」
急に口を尖らせてきた。
「我が国の女がフランス男に篭絡されるなぞ。いや全く」
「しかも人妻だよね」
「そうです」
上司の言葉に頷く。相変わらず鍵穴から部屋の中を覗き込みながら。
「全く以ってけしからん」
「それで誰なのかな」
「むっ、あのドレスは確か」
ここであることに気付いた。

「あれは」
「誰のものかわかったのかい？」
「私の妻のものです。ということは」
「男爵、それは若しかして」
ダニロは自分の前で覗き続けている男爵に対して尋ねてきた。
「卿の奥方が」
「そんな馬鹿な、こんなことが」
「けれど卿の奥方はドレスを他の人に貸すような方かい？」
「いえ」
その言葉には首を横に振る。
「そんなことはありません」
「それでは間違いないんじゃないかな」
「しかしカミーユ氏が見えません」
「逃げたのかも」
「いや、隠れているのです」
きっとした顔で鍵穴から顔を離して立ち上がる。そうしておもむろに扉を開けた。
するとそこにいたのは何とハンナとカミーユであったのだ。
「あれっ！？」
「これは一体」
ダニロと男爵は部屋の中の二人を見て目を丸くさせた。
「妻は何処に」
「奥様、どうして貴女が」
「何でもありませんわ」
ハンナは何気なくを装ってこう言ってきた。
「何でも」
「そんなわけがあるのかな」
何故か、男爵とカミーユにはそう思えるものでダニロはハンナに不機嫌な顔を見せてきた。
「果たして」

「何が仰りたいのですか？」
「いや、別に」
剣呑な調子でそれには答えない。
「ただね。どうも」
「言いたいことがおありでしたら仰っては？」
ハンナもムットした顔で言い返してきた。
「お互いにとってよくありませんわよ」
「それは詭弁ですな」
しかしダニロも負けてはいない。こう言うのだった。
「それは」
「では私の妻ではないと」
「ええ、そうです」
男爵にカミーユが慌てて相槌を打ってきた。
「ですから」
「まあ私の妻でなければよい・・・・・・というわけでもない」
そう言ってカミーユに顔を向けてきた。
「よいですかな」
怖い顔で彼に言う。
「何でしょうか」
「今後こういうことがないようにして頂きたい」
「それはどういうことで？」
「奥様にお近付きになられぬよう。おわかりでしょうか」
「何だ、そんなことですか」
しかし彼はそれを聞いて何か肩のつかえが取れたような顔を見せてきた。そのうえで男爵に対して答えるのであった。
「それでしたら」
「納得して頂けましたか」
「はい」
にこりとして頷く。『彼女』には興味がないから当然であった。
「そういうことでしたら」

「よくぞ退いて下さった」
男爵は何もわからずに頷く。

第二幕その七

「おかげで私の悩みが一つ消えました」
「それは最初からなかったのでは？」
「ははは、確かに」
別の、本当の悩みが当たっているのはこの際気付いていないからどうでもよかった。
「そうですな。それでは」
「はい、それでは」
「何もなかったということで。閣下もそれで宜しいですな」
「まあね」
不機嫌な顔で男爵に応える。
「じゃあそういうことね」
「はい、それで」
「あなた」
ここで平気な顔をして男爵夫人がやって来た。
「どうなさったのですか、このような場所で」
「いや、何もないよ」
しかし男爵は呑気な顔で妻にこう応えた。
「何もね」
「左様ですか。だったら宜しいのですが」
「そう、何もなかった」
ダニロはハンナをじっと見ながら言った。目はかなり剣呑になっている。
「何もね」
「随分棘のある物言いですこと」
「そうでしょうか。私は普通ですが」
「隠してもわかります」
ハンナも負けじと言い返す。

「本当のことなぞ思いもしないで」
「本当のこと！？」
「ええ、そうですわ」
ここで彼女は賭けに出た。その賭けとは。
「実はですね」
男爵夫人に対して言ってきた。
「はい」
「何もなかったというわけではないのです」
「ちょっと奥様」
男爵夫人はその言葉に慌ててハンナに囁いてきた。実は男爵夫人の身代わりにハンナが忍び込んでいたのである。夫人は部屋の窓から逃げ去ってここまで来ていたのである。
「それは言わない約束の筈」
「御安心下さい、貴女のことではありません」
「本当ですか！？」
「ええ」
にこりと笑ってそう返す。
「ですから。御任せ下さい」
「わかりました。それでは」
「はい。皆さん」
一同に対して宣言してきた。
「お話することがあります」
「何だ！？」
「何事！？」
それを聞いてあの四人もやって来た。酒と美女に酔い痴れてかなり恥ずかしい顔になっているがそこままやって来たのであった。
「全く以って」
「何と言うべきか」
男爵と秘書は彼等の姿を見て囁き合う。
「意外と彼等もその祖国も籠絡させ易そうだな」

「日本はあれですけれどね」
ここで秘書は言ってきた。
「忠実な友人だと言っておけばそれだけで見返りが凄かったですが」
「後の三国も思ったより簡単そうだな」
「全くです。ロシアは頭を下げて友好的にしていればいいですが」
「アメリカと中国は適度にあしらうことも接近することも可能だな」
「ええ。まあ小国のやり方を」
「していくとしよう」
そんな話をしていた。ダニロはその横でじっとハンナを見ている。
「それで一体」
「私、決めました」
高らかにこう言うのだった。
「婚約者を発表します。密会の場を見つかってはもう隠しようがありません」
「密会相手というと」
「まさか！？」
カミーユと男爵夫人はその言葉を聞いてお互いの顔を見合う。
「僕のことかな」
「まさか」
「私の婚約者とは」
ハンナは彼等をよそに言う。それは。
「この方です」
「えっ！？」
「何と！」
それは何とカミーユであった。一番驚いたのは彼であった。
「僕が！？何時の間に」
「既に決まっていたではありませんか」
「そうですの！？」
「いや、全然」
唖然とした顔で夫人に応える。

第二幕その八

「今はじめて聞いたけれど」
「はじめて！？」
それを聞いて最初に顔を顰めさせたのはダニロであった。
「何だそれは。幾ら何でも相手がはじめてというのは」
「何ということだ！」
「フランスに先を越されただと！」
これに今更のように怒りだしたのは例の四国の者達であった。
「けしからん！」
「やはりフランス人はフランス人ということですな！」
「また勝手なことを」
「自分達は何なのだか」
そこに来ていた客達は口々に呟く。
「どっちにしろ気付かないのが悪いのではないのか」
「全く。何処までも我儘な」
「そんなことはどうでもいい」
しかし男爵は狼狽しきった顔で彼等に対して言うのだった。
「これは大変なことだぞ」
「大変なことですか」
「フランスに金を持っていかれるのだぞ」
本音を全く隠すことなく言ってきた。
「それでよいのか。我が国は破産だぞ」
「破産って」
「幾ら何でも極端な」
「クラヴァリ伯爵家の資産はな」
呑気な彼等に対して言い返す。狼狽しきった顔が真実味をそれだけで伝えていた。
「ルクセンブルグの国家予算レベルなのじゃぞ」

「へっ！？」
「ルクセンブルグ並！？」
「左様」
男爵は言う。
「これでわかったじゃろう。だからじゃ」
「それを早く言って下さい！」
「それでしたら」
「ずっと前から言っておるだろうが」
男爵はいい加減頭に来て半ば彼等を怒鳴りつけた。
「それを聞いておらんだけじゃ」
「聞くも何も」
「こんなのって」
「我が国の外務省はまともな人材がおらんのか？」
あまりにも酷いので秘書に囁く。
「あの四国と同じレベルだぞ」
「もっと低いのでは？」
秘書も呆れ果てて言う。
「イギリスかオーストリアに研修に行かせますか」
「そうじゃな。このフランスでも本当はいいのだが」
どの国も欧州においては外交巧者で知られている。フランスも長い間イギリスやオーストリアと渡り合ってきている。かつてはタレーランという性格も行いも非常に悪いが天才的な外交官も生んでいる。ナポレオンさえ手玉に取った男である。
「遊んでばかりなのかな」
「困ったことです」
「しかも。最も困ったことに」
彼はまた言う。
「どうしたことか」
「伯爵家の財産なぞどうでもいい」
しかしダニロは別のものを見ていた。

「しかしこれは」
「そうです、閣下」
男爵は慌ててダニロを急かす。
「このままでは富はフランスに」
「だからそれはどうでもいいんだ」
「よくはありません」
男爵は怒って伯爵に言い返す。
「それこそが」
「全く。カミーユさん」
「はい」
何が何だわからないカミーユが彼女に応える。
「何でしょうか」
「本当なのでしょうか。これは」
「いえ、僕にもわからないんですがね」
こうした場では本来有り得ない程の非常識な返事が返って来た。
「何が何だか」
「そんなわけがあるか！」
「君は出し抜いたのだろう！」
「いや、出し抜くも何も」
今にも掴みかかからんばかりの四国の者達に対して言う。
「僕も今はじめて知ったことで。そもそも」
「では皆様」
ハンナが強引に言ってきた。
「フランス風に。エレガントに参りましょう」
「ふん、誰が」
「全く」
四人は真っ先に反対を述べてきた。
「そんなものの何処が面白いのか」
「願い下げですぞ」
「やはりここは我が国の」

「いやいや我が国の」
「どれにしろ同じじゃないか」
男爵は四人の話を聞いて一人言う。
「しかしこれは」
カミーユはまだ戸惑っている。その中で述べる。
「僕が結婚などと」
「それはどうでしょうか」
しかしハンナはそれには悪戯っぽい笑みで返す。
「果たしてどうなるか」
「どうなるかとは？」
「何かおかしいですぞ」
「おかしくはありませんわ」
ハンナはまた軽い調子で四人に返す。
「殿方が右と言えば女性は左へ。それがフランス風なのですから」
「左様ですか？」
「いいえ」
カミーユは男爵夫人の問いに首を横に振る。
「初耳です」
「そうですよね。何が何だか」
「ここは落ち着こう」
ダニロはその中で一人独白していた。
「さもないと余計にな。大変なことになる」
そう言ってハンナに顔を向ける。冷静さを保ちながら声もかける。

第二幕その九

「奥様」
「何でしょうか」
しれっとして彼に返す。
「私に何か御用で？」
「ええ、勿論です」
笑みがいささか引きつっているがそれでも言うのだった。
「御結婚の御祝いに一曲宜しいでしょうか」
「あら、曲をですか」
「ええ、歌をです」
怒りのあまり言葉を言い間違えた。ハンナはそれを見抜いて内心とても楽しげである。
「宜しいですね」
「ええ。それでは御願いします」
「それでは」
ダニロは一旦態度をあらためる。そうして静かになった場で歌いはじめるのであった。
ハンナとの間には相変わらず丁々発止の様子であるがそれは誰にも気付かれてはいない。
「昔あるところに王子と王女がおりました。二人は愛し合っていたのですが王子は黙ったままでありました」
「それは何故ですの？」
「さて」
ここでのハンナの問いにはとぼけてみせる。
「それはともかくそれを恨んだ王女はとんでもなく残忍なことを思いついたのです」
「銃で撃った」
「毒饅頭を食べさせた」

「酒で酔わせて河へ」
米中露三国の者達がそれを聞いてとんでもないことを言い出した。
「いやこれはまた恐ろしい」
「大変なことですな」
「彼等の方が恐ろしいとは思わないか？」
男爵は彼等の言葉を聞いて秘書に囁いた。
「どう思う？」
「その通りですが彼等の耳には入りませんので」
秘書は男爵に苦笑いでこう返してきた。
「それはまあ」
「幸せなことだ。どんな耳をしているのか」
「しかし残酷な仕打ちとなりますと」
とりあえず物騒ではない日本の外交官が口を開いてきた。
「浮気でもされたのですか？当てつけに」
「そう、その通り」
ダニロは彼の言葉に応える。そのうえで歌を再開させる。
「その手を他の男に与えたのです」
「何だ、そんなことか」
「到って大人しい」
「何処が残酷なのやら」
また三国の者達が言う。男爵もそれを聞いてまた秘書に囁く。
「彼等と戦争をしたら何をされるかわからんな」
「実際に相手は恐ろしい目に遭っていますが」
秘書は歴史を知っていた。それが答えであった。
「それこそもう」
「困った話だ」
「それで王子は我慢できなくなり叫んだのです」
「何とですか？」
ハンナは楽しげにダニロに問う。
「一体全体」

「貴女の為さることは間違っています」
きっとハンナを見据えて言ってきた。これで王子と王女が誰かはっきりした。
「貴女は他の女達と同じように浮気な方です」
「おやおや」
ハンナはしれっとした様子で話を聞き流すふりをした。
「それはまた」
「しかし。王子はさらに言ったのです」
「何と」
いい加減鈍い日本の男が尋ねてきた。何かハラハラとしている。
「何と言ったのですか、王子は」
「しかしそれを私が恨んでいると思ったら間違いだと。夢にも思わないと」
「負け惜しみだな」
「そうですね」
男爵と秘書はそれを聞いて囁き合った。
「それ以外の何者でもありませんな」
「全くだ」
「最後に王子は言い残しました。あの人と一緒になればいい。御似合いだと。そう言い残して風と共に去ってしまったのです」
「あら、そうですの」
自分のことを言われているとわかっているので内心思うところがあるにしろそれを隠しているハンナであった。まるで鷹の爪のように。
「残念なことです」
「それでは私も王子に倣い」
さっと身を翻してきた。
「これでお邪魔しましょう」
「あら、どちらへ」
ハンナはそれに問う。ダニロはシニカルに笑ってそれに応えるの

であった。
「馴染みのマキシムへ。では」
「ではって閣下」
男爵が何とか止めようとするがダニロの動きは速かった。瞬く間にその場を後にしたのであった。
「全く。気紛れなのだから。何とかしなければなりませのね」
「そうですわね」
張本人のハンナがそれに応えてきた。
「ここは何としても」
「あの、奥様」
流石に今の言葉には呆れて男爵は言ってきた。
「それはですね。貴女のことなのですが」
「実はですね、私」
彼の言葉を無視して言ってきた。聞いてはいない。
「そのお話の本当の最後を知っているのです」
「別れで終わりではなかったのですの？」
「はい」
にこりと笑って男爵夫人に答える。
「その結末が書かれている本はパリのある場所にあります」
「それは一体！？」
「何処なんだ！？」
「そもそも話がずれてきていないかな」
四国の者に混じって完全に蚊帳の外に置かれてしまっていたカミーユが呟く。
「僕のことは一体」
「貴方のことはなかったことにしましょう」
男爵はさりげなく無茶苦茶な提案をしてきた。
「それで如何でしょうか」
「如何も何も僕にも何が何だか」
「さあ皆さん」

ハンナは彼をよそにその場にいる一同に声をかける。
「マキシムへ。いざ」
「畏まりました」
「それでは」
何はともあれお祭り騒ぎの場はマキシムへ移ることとなった。これはこれで大騒動となるのであった。しかし楽しい大騒動でもあるのだった。

第三幕その一

第三幕　最後は華やかに

そのマキシム。まるでロココ時代の宮殿の如き広間において早速賑やかに歌や踊りが繰り広げられていた。ハンナはそれを豪奢な椅子に座って楽しげに眺めていた。

「あら」

ここで彼女は男爵夫人がいないのに気付いた。

「奥様は？」

「はい、実はですね」

夫である男爵がここへ来て述べる。

「用事ができまして」

「用事！？」

「実は家内はこの店の踊り娘出身なのですよ」

「おや」

「それはまた」

皆それを聞いて思わず声をあげる。見ればやはりあの四国の者達もダシに使われているカミーユもいた。皆ハンナの家からそのまま来たのである。

「そうだったのですか」

「といっても勿論専属ではありませんが」

男爵は笑って答えてきた。

「遊びで来ていたのですよ。それでも踊りは見事なものですが」

「しかしまあ」

「貴族の子女とは少し思えませんな」

「まあまあそれは御気になさらずに」

男爵はこれに関しても強引になかったことにしようとする。案外強引な解決法を多用する人物である。これは少し意外なことではあるが。

「私としても不本意ですが妻が是非にといいまして」
「それでは奥様の踊りを」
「そうです。踊り娘達と共に」
男爵は皆に答える。
「御覧になれます。さあ」
豪奢なゴブラン織のカーテンが開かれる。そこには舞台があった。舞台は左右に階段がありそこから二階に行ける。しかしその階段はオーケストラが占領し指揮者までいた。派手な踊り娘七人のグリゼット達が並んでいるそこには男爵夫人もいた。完全にその中に溶け込んで妖艶な笑みを浮かべていたのであった。
「ほう」
カミーユがその男爵夫人を見て口笛を吹いた。
「これはまた」
「さあ皆さん」
オーケストラに乗り六人の娘達は言ってきた。
「ロロ」
「ドド」
「ジュジュ」
「フルフル」
「クロクロ」
「マルゴ」
まずは七人が名乗った。そのうえで男爵夫人も。
「そしてこの私。さあ皆さん」
中央にいる男爵夫人が言う。すると音楽がはじまり派手な踊りをはじめた。
「夜の大通りを私達グリゼットはふらふらと」
「色目を使いながら行ったり来たり」
調子よく歌う。男爵夫人に六人がついていた。
「トリッペル！トラップ！」
掛け声であった。

「トリッペル！トラップ！」
「さあ皆さん」
男爵夫人はその掛け声の中で歌で語り掛ける。
「黄金色のブーツでトリッペル、トラップ」
リズムを取りながら言う。
「小粋な帽子でお洒落して行ったり来たり」
「トリッペル！トラップ！」
「それが私達パリのグリゼット」
「ロロ」
「ドド」
「ジュジュ」
「フルフル」
「クロクロ」
「マルゴ」
「そしてこの私！」
またしても名乗りをあげる。
「リタントゥリ、タンティレット、これが美しいグリゼット達！パリのグリゼット達！」
「蜘蛛が巣を張って待ち構え」
男爵夫人はそう妖しく歌う。周りの六人も妖しく踊る。煽情的なダンスであった。

第三幕その二

「ツィッペル、ツィッペル、ツィッペルツァップ、小さな蝶を捕まえるように」
「私達の目当ては男達」
踊りながら歌を続ける。
「相手がもがけばもがく程誘って。そうして楽しむのがグリゼット」
「如何ですか？」
ハンナは彼女達の歌を前にして客人達に問う。にこやかな笑みであった。
「ここでの宴は」
「ふん」
その言葉にダニロが面白くなさそうな顔を向ける。結局彼も同席する羽目になったのである。これこそ因果と言うべきであろうか。
「ここ、お好きなのでしょう？」
「どうでしょうか」
「あら、素直でない」
「いえ、私は素直です」
ハンナの言葉に突発的に怒って言葉を返す。その怒りのまま言う。
「宜しいですか、奥様」
「何でしょうか」
「そもそも私はですね」
席を立ってハンナに言ってきた。
「貴女には随分と言いたいことがあります」
「私に！？」
「そうです。カミーユさんと結婚してはなりません」
「あらまたどうして」
二人は周りに人がいることをふと思い出す。そうして言うのだった。

「いえ、それは」
「まあそれはいいでしょう」
一旦はそれはよしとした。
「場所を。変えましょうか」
「はい。それでは」
こうして二人は一旦マキシムの個室に入った。そこで話をするのだった。
そこはポーカーをする場所だった。そこでテーブルを囲んで話をはじめていた。一応はお互いにカードを手にして勝負をしているがそれは本題ではなかった。
「さて、お話とは」
ハンナはカードを交換しながらダニロに声をかけていた。
「何でしょうか」
「さて」
ダニロはさっきの言葉をとぼけてみせてきた。
「忘れてしまいました。何のことだか」
「何のこと！？」
ハンナはその言葉に眉をピクリと動かしてきた。
「まさかとは思いますがとぼけていらっしゃるのですか？」
「とぼけている？まさか」
しかし実際にとぼけてみせていた。
「何のことか。それにしても」
ダニロはカードを切りながらハンナに言ってきた。
「よくもまあ。貞淑だと言いながらカミーユさんと」
「あら、そのことですの」
カードの奥で眉をピクリと動かしてきた。
「そんなことを何時までも」
「何時までも、ですか」
ダニロの言葉に怒りが含まれた。
「よくもまあそんなことを仰るものです」

「仰るも何も私はこの目で見ましたから」
ハンナに対して言う。
「ですから嘘は」
「あれは私ではありませんわよ」
ハンナは平気な顔で言い返した。ポーカーだが感情を露わにして見せてきている。
「また御冗談を。ではあれは」
「身代わりだったのです」
ハンナは真実を述べてきた。
「私はある方の身代わりだったのですよ」
「身代わり！？」
「そうです。ですから貴方は誤解しておられうだけです」
「また嘘を」
「ダニロ」
ハンナは遂に仮面を投げ捨てた。そうしてハンナとしてダニロに言葉を向けてきた。
「私が嘘をついたことがあったかしら」
「ないね」
ダニロもまたダニロとなった。伯爵でも大使でもなくダニロとしてハンナに返す。
「そうよね。じゃあ」
「これはヴァイオリンの響きさ」
そう言葉を誤魔化して言ってきた。
「それがワルツのステップを誘う。私を愛して、とね」
「私を愛して。それなら」
ハンナはそれに応えて言う。
「握られた手ははっきりと告げる」
「その言葉は知っているよ」
ダニロはそれに応えてきた。
「それは本当だ、貴女は私を愛している」

「ワルツのステップを踏む度に心も共に踊り高まっていく」
ハンナは言葉を歌にして交あわせていく。
「私も貴女を愛していると。違うかしら」
「その通り、貴方は私を愛している」
また言った。
「そうよね」
「そうさ。ほら」
ダニロは自分のカードを出してきた。
「ストレートフラッシュ。僕の勝ちだね」
「いえ、私の勝ちよ」
しかしハンナは優雅に笑って彼に返す。
「ほら」
出してきたのはロイヤルストレートフラッシュであった。これで決まりであった。

第三幕その三

「私の勝ちね、いいわね」
「じゃあそれでいいよ」
ダニロも笑ってハンナに言葉を返す。
「それでね」
「そうね。じゃあダニロ」
「ハンナ」
二人はカードを置いて笑みを見せ合う。もう言葉は必要なかった。
「これからは二人で」
「色々あったけれど」
全てが決まった。そうすると部屋の中に皆雪崩れ込んできたのだった。
「やあやあ、やっと決まりましたな」
男爵が満面に笑みを浮かべて二人のところにやって来た。そうして言うのであった。
「閣下、お見事です」
ダニロに顔を向けて言う。
「これで公国は救われました」
「そう、そして男爵」
ダニロは笑って男爵に声をかけてきた。
「あの時部屋にいたのは彼女ではなかったんだ。それはね」
「閣下」
ここで秘書が出て来た。
「どうしたんだい？」
「これがあの部屋で見つかったのです」
「それは」
「あっ」
それは扇であった。男爵夫人はその扇を見て声をあげた。

「私の」
「これは妻のだ。だとすると」
「あなた」
しかし男爵夫人はしれっとして夫に対して言ってきた。
「浮気をしていたのを詫びるつもりかい？」
「いえ、ほらここを」
夫に対して扇を広げてそこに書いてある文字を見せてきた。
「御覧になって下さい」
「むっ、これは」
そこに書いてある文字は。こうであった。
「私は貞淑な人妻です」
男爵はその言葉を読んだ。
「というと」
「そうです、私を信じて頂けますね」
「うん、勿論だとも」
扇を妻から受け取って応える。
「こんなことだったとは」
「やれやれ」
カミーユは何か全てが幸せに終わったと見て安堵の溜息をついてきた。
「今日は大騒動でしたね」
「全くです」
日本の外交官が言った。
「しかもお株は全部奪われ」
「我々が貰ったのは」
アメリカの外交官が続く。
「宴でのお酒だけ」
「しかしまあハッピーエンドを見れたのは」
中国の外交官は苦笑いを浮かべていた。
「よしとしますか」

「しかし今回得られた教訓は」
ロシアの外交官は蘊蓄をたれてきた。
「とても大事なことですな」
「そうです」
ハンナは皆に囲まれて優雅な笑みを浮かべて述べてきた。
「女を知ることは非常に難しいのです」
「僕達男を悩ませる」
ダニロは苦笑いを浮かべてハンナ、自分の妻に顔を向けたうえで言った。
「女の心も身体も知ることは難しいもの」
「そう。それでも」
「優しい娘さんもおしとやかな奥様も」
皆それに合わせて言い合う。何時しか皆の手にはシャンパンがある。あれ程あれこれと抜け駆けだの何だのと言っていた四国の者達もカミーユも踊り娘達も公国の者達も皆シャンパンを手にしていた。
「青い目をしたブロンドの美女も赤い髪の毛でも黒髪でも」
「皆同じこと」
「男は皆虜にされる」
「されど」
ダニロはここで言ってきた。
「虜にされ、迷うことこそがこの世で最大の悦び」
「さあ皆さん」
ハンナが音頭を取る。
「今こそ」
「ええ」
「乾杯！」
「乾杯！」
こうして華やかな宴にまた入った。ダニロとハンナは何はともあれ収まるべき鞘に収まったのであった。そうして二人で楽しい日々の幕を開けたのであった。

メリー＝ウイドゥ

完

2007・5・11

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3584g/

メリー＝ウイドゥ

2011年4月28日00時36分発行